

わかる授業

Support Guide

本冊子は、『「確かな学力の向上」支援プラン』の改訂版として、「わかる授業」の構築による「確かな学力」の向上（施策の中核）の充実を具体的に推進するための手引き書です。

是非、児童生徒一人一人の実態を踏まえ、教材と向き合い、評価規準の設定や学習内容を焦点化するなどの教材研究を充実させ、「授業が楽しい」を児童生徒に実感させるとともに、自らも実感する資料として御活用ください。授業づくりと授業実践を楽しむことが、更なる創造力を培う原動力となります。

平成25年10月

沖縄県教育委員会

はじめに

学習指導要領では、基礎的・基本的な知識や技能の確実な習得、思考力・判断力・表現力等の育成、主体的に学習に取り組む態度の育成が重視されております。そのため、社会や科学技術の進展等に伴い児童生徒に必要な知識・技能についての指導や、つまずきやすい内容を確実に習得させるための繰り返し学習の充実や、思考力・判断力・表現力等の育成など、各教科等の指導の中で、観察・実験やレポートの作成など知識・技能を活用する学習活動の充実を図るとともに、教科等を横断した課題解決的な学習や探究的な活動を充実させることが明記されております。

上記のことを踏まえ、各学校におかれては、学校教育目標を達成するため、児童生徒一人一人の現状・背景を見据えつつ、効果的な授業づくり、学級経営の充実を図っていただいております。保護者や地域の皆様におかれては、各学校の教育活動への御理解と御支援を賜るとともに、社会のあらゆる場で子どもたちの「生きる力」を育むための活動に取り組んでいることに感謝申し上げます。

さて、本冊子は、「わかる授業」を構築するための諸方策として、「本冊子の活用に当たって」、「学力向上に係る課題」、「授業改善の視点と構想」を前段に、「教材研究」、「学習評価」、「学習方法」、「学習形態」、「学習を支える力の育成と学習規律の徹底」、「校内研究」、「家庭や地域・学校が連携した取組」の7のカテゴリーで構成し、それに係る現状・実態として、全国学力・学習状況調査の児童・生徒質問紙や学校質問紙から代表的な事項の状況を掲載しています。

まず、児童生徒を目の当たりにして授業づくりに励んでいる教師一人一人が、これまでの実践と照らし合わせながら読み、日々手に取り繰り返し目を通すことで、各々が目指す「授業づくり」を具体的にイメージし、日々の実践につなぎ、自らの「授業論」の確立に役立てていただければ幸いです。

是非、自らの授業を直視し、目の前の児童生徒一人一人が「わかる・できる」ことを楽しさや喜びとして実感できる授業づくりに一層励むことで、本県の未来を担う児童生徒一人一人に、「確かな学力」を確実に身に付けさせるようお願いします。

平成25年9月

沖縄県教育委員会

教育長 諸見里 明

～「人材を以て資源と為す」沖縄の教育～

沖縄県の教育と世界にはばたく子ども達

本県においては、学校教育のみならず社会教育や家庭教育においても、私たちの先人が創り上げた歴史・文化・芸能などを重視し、先祖を大切にし、郷土を愛する心などを育む取組がなされてきた。県内各地で行われている旧盆の行事（エイサーや綱引きなど）や豊年祭、ハーリーなども、心の拠り所となっている。それにより、郷土の歴史・文化・芸能等の大切さに気付くとともに、自信と誇りを育んできたものと捉えている。これらは、人生の節々で、どこにいても無意識のうちに思い起こされ、心の支えとして働くものとする。

ところで、全国的には、少子化により人口減が顕著に現れているが、本県は、離島・へき地など一部の地域を除いて、児童生徒数は横ばい状態にあり、学校を取り巻く状況は活気がある。また、地理的にも、東アジアの主要都市間の中央部に位置しており、今後、物流、情報通信、観光業などの経済的な発展も見込まれる。

そのような恵まれた環境の中、本県の幼児児童生徒は、文化面・スポーツ面等において九州や全国における各種大会等での活躍が目覚ましく、世界レベルで活躍する人材も増えつつある。

学力面においても、「わかる授業」の構築を基軸に、児童生徒に「やればできる」という自信と勇気を抱かせ、児童生徒が持っている可能性を引き出し伸ばすことで、人生を自ら切り拓くことができる力を育み、様々な場で活躍できる人材を育成する必要がある。

今後も大切にしてほしい沖縄の教育

- 万国津梁や守禮之邦、イチャリバチョーデー、ユイマールの心を大切に、本県の幼児児童生徒一人一人を全面的に支援する教育
- ・幼児児童生徒一人一人が夢や希望を持って伸び伸びと活動できる教育
- ・「確かな学力」の向上を図る児童生徒一人一人に寄り添った教育
- ・両親や家族、お年寄りや友達などを思いやる心を育てる教育
- ・郷土の歴史・文化への関心を高め、子ども達の自信や誇りにつながる教育

本県の「確かな学力」の向上に係る成果と課題

「全国学力・学習状況調査」結果に見る成果と課題

- 学習意欲は全体的に高く、教師と児童生徒の信頼関係が良好である。
- 全科目において全国平均正答率との差があり、下位層の割合が高い。
- 全体的には無解答率は改善されつつあるが、記述式の問題等で無解答率が高い。
- 「考えを引き出し、思考を深める」発問や指導及び「ノート指導」の不十分。
- 朝食摂取や起床・就寝、帰宅時刻などの規則正しい生活リズムに係る「基本的な生活習慣」の未確立。

目次

はじめに	
「人材を以て資源と為す」沖縄の教育	
徹底事項	1
I 本冊子の活用に当たって	2
1 本冊子の活用	
2 本時の授業	
3 授業は生きているから、面白く、やりがいがある	
II 学力向上に係る主な課題	3
1 教育課程編成・実施上の課題	
2 全国学力・学習状況調査から見える課題	
III 授業改善の視点と構想	4～6
1 授業改善の視点と構想	
2 授業力向上のための要素	
3 思考を深める言語活動	
4 課題を踏まえた授業改善	
IV 教材研究	7～9
1 教材研究の基盤	
2 教材研究の流れ	
3 教材研究のポイント	
4 教材研究と年間指導計画の見直し	
5 教材研究の具現、週案の活用	
V 学習評価	10・11
1 学習評価の意義	
2 指導と評価の一体化	
3 形成的評価の位置付けとフィードバックの機能化	
4 形成的評価と総括的評価の位置付けとフィードバックの機能化	
VI 学習方法	12～16
1 効果的に身に付けさせる一方策	
2 授業づくり及び実践の段階で重視したいこと	
3 授業の基盤となる支持的風土づくり	
VII 学習形態	17・18
1 「わかる授業」をつくる学習形態	
2 交流活動を活性化する基盤	
3 交流活動を活性化する工夫	
4 交流活動を活性化するための形態の工夫	
VIII 学習を支える力の育成と学習規律の徹底	19～21
1 「学習を支える力」と「学習規律」の捉え	
2 学習規律の徹底	
3 学習を支える力と学習規律の取組例	
4 「家庭学習」の充実	
5 保護者への周知及び協力体制の構築	
IX 校内研究	22～24
1 診断的評価、形成的評価、総括的評価及び諸調査の結果の活用	
2 各学校における「確かな学力」の向上を図る具体的な取組	
3 授業力を向上させる授業研究会	
4 参加者全員が自分の考えを持ち主体的に関わる授業研究会	
5 教育課程編成の改善	
X 家庭や地域・学校が連携した取組	25
1 家庭における取組	
2 地域による家庭及び学校の支援	
資料編	26～28

自ら学ぶ意欲を育て、学力向上を目指すとともに、豊かな表現力とねばり強さをもつ幼児児童生徒を育成する。

本県教育目標から

徹底事項

- 1 単元に入る前に、児童生徒の実態を踏まえ、教材と向き合い、評価規準を設定し、学習内容を焦点化する。

目の前の児童生徒に「何を身に付けさせるか」を明確にして、それを確実に身に付けさせる授業づくりを徹底すること。(説明責任)

- 2 単元に入る前に、診断的評価（レディネステスト等）を実施し、児童生徒一人一人の学習の定着状況を的確に把握し支援する。

学年や学級全体、そして児童生徒一人一人の学習の定着状況を的確に把握し、単元指導計画に活かしたり、基礎・基本が身に付いていない児童生徒への個別の指導・支援を徹底したりすることで、学習意欲を高めること。診断的評価は実施（把握）することが目的ではない。(支援の徹底)

- 3 形成的評価、総括的評価から、学習の定着度を把握し、身に付いていない内容があれば、フィードバックする。

形成的評価も総括的評価も、学習の定着状況（点数）のみを把握するために行うものではない。自らの授業を振り返り見直したり、学習の定着が弱い児童生徒を具体的に支援したりするために行い、未定着のまま次の単元に進んだり、次の学年に進級させたりしないこと。(結果責任)

- 4 前時の授業に、プラス1のスパイスを加える。

全ての教師が、自らの授業にプラス1のスパイス（アイデア）を加えれば、全国学力調査における正答率は直ちに全国平均へ到達する。自らの授業に、常にプラス1の姿勢で臨むこと。(学習意欲の向上)

I 本冊子の活用に当たって

1. 本冊子の活用

本冊子は、「わかる授業」を構築するための諸方策として、「本冊子の活用に当たって」、「学力向上に係る課題」、「授業改善の視点と構想」を前段に、中段・後段には、実際の取組について7の категорияで構成し、示している。従って、各自が確認したいcategoryについて、これまでの実践や自校の状況と各categoryに係る現状・実態として掲載した全国学力・学習状況調査の児童・生徒質問紙や学校質問紙と照らし合わせながら読みはじめることを奨める。(質問紙の選択肢は、「当てはまる」→「当てはまらない」や「している」→「全くしていない」などの並びが大方である。)

質問紙の状況については、児童生徒個々及び各学校ごとの評価基準が違えることが考えられるため、絶対的な数値とは言い難い。しかし、数値そのものが表している状況やその背景、要因等について分析・推察し、数値が表していることと授業づくりの視点をつなぐことで、改善策を練り、自らの授業力の向上に生かしていただきたい。

なお、本冊子は発行部数に限りがあり、関係者全員に配布することができないため、学校及び関係機関においては、必要に応じて、沖縄県教育委員会のサイトからダウンロードして活用していただければ幸いである。

2. 本時の授業

本時の1時間の授業は、たった1時間の授業ではあるが、本時に至るまでの何百、何千時間の総まとめの授業であり、今後の何百・何千時間の授業につながる重要な授業でもある。

つまり、授業は単独では存在せず、常に連続性、系統性、関連性など、縦、横、斜めの関係でつながり合っているため、決して手を抜くことができない。

たかが1時間の授業、されど1時間の授業である。次に、目の前の児童生徒を受け持つ教師へ、自信を持ってつなぐためにも、プロの教師として「わかる授業」の構築に全力を投じよう。

3. 授業は生きているから、面白く、やりがいがある

⇒如何にして、意欲を喚起し、イメージさせ、既習事項や児童生徒相互を「つなぐ」か

授業には、ある程度、決まった進め方(パターン)はあるが、絶対的な進め方は存在しない。授業開始の教師の一言、目標(めあて、ねらい)の提示、教師の発問と児童生徒の思考、話し合い、考えのまとめ、思考を整理させるための板書、ノート指導など、その時々授業のなかで、どう有機的に生かされているかが、授業の善し悪しを決める。

どのように発問し、何を考えさせ、発表させるか、どのような学び合いを取り入れるか、いつ机間指導(助言・支援)を行い、どのように説明し、何を板書するか、また、考えさせる時間やノートまとめの時間をどのくらい確保するか、などの内容や順序は、児童生徒の思考過程やその充実度等によって多様な方法がある。

授業の進め方としても、児童生徒の思考をゆさぶり、多様な考え方を引き出すための「発問(問答法・一問多答式)」が一般的には多用されるが、場合によっては、一つの答えを引き出すための発問(質問・一問一答式)がよかったり、一方向で教える「説明」(講義的方法)がよかったり、前者(発問・質問・説明)がなく資料の提示のみで考えさせる方法(提示・分析的方法)がよかったりすることもある。また、1単位時間、一人(個々)で悶々と考えさせる授業があってもよいし、集団で学び合う授業があってもよい。従って、常に、児童生徒一人一人の思考・心理状態を見取り・見極めながら、児童生徒の気持ちを高め、本時の目標(めあて、ねらい)を達成しつつ、B評価(規準)に全ての児童生徒を到達させるために最善を尽くすことが必要なのである。

II 学力向上に係る主な課題

1. 教育課程編成・実施上の課題

※下の表は、平成24年度の本県小中学校の平均的な状況である。

	内 訳	時 数	備 考
小学校第5学年	年間授業実施可能時数	1128時間	年間授業日数202日
	行事時数	64時間	儀式的、体育的、文化的行事等
	その他、欠時数	21時間	家庭訪問、懇談会等
	年間授業実施時数	1043時間	標準時数(980) + 63時間
中学校第2学年	年間授業実施可能時数	1164時間	年間授業日数201日
	行事時数	40時間	儀式的・文化的行事、生徒会行事等
	その他、欠時数	41時間	家庭訪問、面談等
	年間授業実施時数	1083時間	標準時数(1015) + 68時間

<授業実施時数の確保1>

○家庭訪問や面談等への対応で「欠時」が多い。

※例えば、年間20時間の欠時があった場合、1教科の2～3単元分の授業時数を失ったことに相当する。行事の内容や実施時期、事前対応等について検討する必要がある。

<授業実施時数の確保2>

○儀式的、文化的、健康安全・体育的、遠足・集団宿泊的な行事や児童・生徒会行事などの準備や練習時間等を確保するため、各教科の授業をカットしたり、予備時数で対応したりしている状況がある。

本県の各教科における年間授業実施時数は、標準授業時数を上回っているが、どの教科も大幅に上回ることはなく、際どい状況で確保されている。上位層への対応や下位層への指導・支援を充実させるためには、行事の在り方を見直し、練習時間等を精選し、欠時等を極力無くし、予備時数を課題である算数・数学の授業に充てるなど、授業実施時数を確実に確保する必要がある。例えば、欠時の30時間、予備時数の60時間（合計90時間）を国語や算数・数学の授業に充てると、ゆとりを持って授業を進めることができ、かなりの効果が期待できる。

2. 全国学力・学習状況調査から見える課題

平成25年度全国学力調査の結果から、正答率30%未満の児童生徒の割合

	教 科	平成24年度		平成25年度		備 考
		本 県	全 国	本 県	全 国	
小学校第6学年	国 語 A	3.5	1.8	10.7	7.4	下位層の割合が高いことが、中学校における生徒指導上の課題に影響
	国 語 B	23.2	18.0	37.1	30.7	
	算 数 A	5.0	2.8	2.3	1.9	
	算 数 B	17.2	11.2	16.3	12.1	
中学校第3学年	国 語 A	4.8	2.5	4.1	2.3	下位層の割合が高いことが、高校進学希望率や高校進学率に影響
	国 語 B	14.0	8.5	12.3	9.0	
	数 学 A	16.9	8.5	16.8	9.0	
	数 学 B	40.1	25.7	54.1	35.4	

Ⅲ 授業改善の視点と構想

授業は、教師の指導力と児童生徒の前向きな気持ち、工夫された教材の3つが揃って成り立つ。

指導力のある教師でも、教材そのものに矛盾があれば、児童生徒は混乱し、何を学んだのか、何ができるようになったのかなど曖昧になってしまう。

また、教材がよくても、教師が正しい教材解釈をしていなく、その教材にふさわしい手立てや工夫がなければ、児童生徒が自らの成長を実感する授業にはならない。もし、よい教材だけで授業が成り立つのであれば、「授業力」という言葉は存在しないだろう。

児童生徒一人一人が生き生きと目を輝かせ、試行錯誤し、学び合い、うなずきがある授業は、全ての児童生徒を高めたいという教師の情熱と使命感による事前の教材分析・解釈と、それに裏打ちされた指導力があって成り立つのである。

1. 授業改善の視点と構想

具体的な授業改善に当たっては、教師（指導者）、児童生徒（学習者）、教材（学習対象や学習内容）の3つの視点からこれまでの実践を見直し改善策を講じる必要がある。

①教師（指導者）については、教材分析力や発問、板書、児童生徒への接し方等の指導技術、資料・教具の効果的な使い方、児童生徒の発達の段階に応じた指導方法の在り方など、授業構想力が基盤となる。

②児童生徒（学習者）については、自ら学び、自ら追究する学習態度の形成、発表や説明の仕方、ノート書き方などの学習方法の習得、教具の使い方、児童生徒相互の交流など、実践を通して学習に向かう態度を育成することが基盤となる。

③教材（学習対象や学習内容）については、児童生徒の実態や発達の段階、日常生活との関連や地域の実態に応じた教材開発、児童生徒が学習に意欲的に向き合える内容や環境の整備、教材の配列の工夫など、全てに合致することが基盤となる。

授業改善の視点	
1	授業の基盤となる支持的風土づくりが構築されているか
2	児童生徒の考えを引き出したり、思考を深めたりする発問や指導ができるか
3	学習（思考）の流れを創ったり、振り返ったりする板書ができるか
4	考えを整理したり、書く楽しさを味わえたりするノート指導ができるか
5	意見や考え等を交わし合う交流活動を仕組むことができるか
6	学びを深める学習規律が確立されているか

2. 授業力向上のための要素

- ①教師の資質・能力のうち、特に実際の授業の場面において具体的に発揮されるものを「授業力」と捉え、その構成要素を次の6つとする。
- ②「授業力」の6つの構成要素について自己診断し、個々の教師が「授業力」に関する課題を明確に認識し、「授業力」向上の具体的な目標をもつ。
- ③校長、副校長、教頭は、教師の「授業力」を高めるため、日常的な授業観察等を通して、ポテンシャルを引き出し、次なるチャンスを与える具体的な指導・助言に努める。

<授業力の構成要素>

<p>使命感・熱意・感性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・豊かな感性を身に付け、教員の職責を自覚し、困難な状況や課題に挑み続ける資質 	<p>児童生徒理解</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒一人一人に寄り添い授業及び日常生活において個々の状況を的確に把握する人間力 	<p>教材研究（教材解釈等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科や関連する学問等に関する深い識見 ・教材分析や解釈、教材開発などの分析・創造力
<p>指導技術（授業展開）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒の立場に立った発問、板書、説明、助言、ノート指導等の指導技術 ・個及び集団への指導技術 	<p>指導と評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒の学習過程や結果の評価、より良い学習へ向けた適切な評価 ・自己の指導に関する評価 	<p>洞察・掌握・統率</p> <ul style="list-style-type: none"> ・集団全体の状況を的確に把握し、先を見据えて、まとめ、リードしたり、引き付けたりする総合力

3. 思考を深める言語活動

- ① 国語科においては、言語能力育成の中核を担う教科として、言語の果たす役割に応じ、的確に理解し、論理的に思考し表現する能力などを育むとともに、生活や学習に必要な能力を身に付けさせるため、記録、要約、説明、論述といった言語活動を充実させる。
- ② 各教科等においては、国語科で培った能力を基本に、観察・実験やレポートなどにおいて、視点を明確にした記録・報告、比較や分類、関連付けといった考えるための技法、演繹的、帰納的な考え方などを活用した思考や説明する活動を充実させる。

言語活動の充実のためのポイント → 思考を深めるために

- ①事実を正確に把握させる。
- ②既習事項を想起させ「つなぎ・関連付ける」。
- ③物事を多面的、批判的に捉えさせる。
- ④こうなるだろうを根拠をもとに「イメージ」させる。
- ⑤他者の話を傾聴し、自らの考えをより明確に組み立てさせる。
- ⑥何事にも諦めず、粘り強く考え抜く態度を養う。

- 本時のねらいは何か、何を身に付けさせるか
※学習評価（B評価）の信憑性と明確化
- 関連する既習事項は何か、それは身に付いているか
- どのように考えさせ、理解させるか
※教材や確認問題は適切か

ねらいや評価規準（B評価）が明確でないと、授業がぶれ、言語活動は充実しない。また、まとめも曖昧になり、児童生徒も「何を学んだのか」「何が分かったのか」さえ曖昧になってしまうなど、学習意欲にも影響する。

- どの場面で、どのような形態にするか
- 個（1人）でじっくり考えさせたり、まとめさせたりする学習か
 - ペア（2人）で、意見を交わしながら理解を深める学習か
 - グループ（3人以上）で、意見を交流させる学習か
 - 学級全体で、様々な考えを出し合って理解を深める学習か
- 言語活動はねらいを達成するための「手立て」

なんのためにするのか

学習形態として、「個→ペア→全体」や「全体→個→ペア」などのパターンに拘ってはいけない。1単位時間、「個」だけで考え抜く授業や「全体」で徹底的に練り上げる授業があってもよい。ポイントは、何を考えさせ・気付かせ・理解させるか等が重要であり、そのための方法や形態を学習のねらいを達成するために工夫することである。

4. 課題を踏まえた授業改善

<p><知識・技能>〔習得〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ○基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を図るため、学習用語や基本的な概念など、意味理解の徹底を図る指導 ○基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を図る、繰り返し指導とそれを日常的に活用する指導 	<p style="text-align: center;">よさや可能性</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「夢や目標がある」の割合が高い。 ○「国語、算数・数学の学習は将来役立つ」と考えている割合が高い。 ○「算数・数学が好き」の割合が高い。 ○「家庭学習」の時間が確保されている割合が高い。 ○「いじめ」はどんな理由があってもダメの割合が高い。 ○教師と児童生徒の信頼関係が良好である割合が高い。
<p><思考力・判断力・表現力等や応用力等></p> <ul style="list-style-type: none"> ○既習事項を意識させ、最後まで諦めずに考え抜く指導 ○「習得」と「活用」のバランスを考慮した指導 ○「読む・書く」活動に粘り強く取り組ませる指導 ○根拠に基づいた発表・説明を徹底した指導 	
<p><全体的な取組></p> <ul style="list-style-type: none"> ○学力の中位・下位層を徹底的に支援する指導 ○無解答を改善する指導 ※考えを論理的にまとめる「書く活動（ノート指導）」の充実 ○全教科による「わかる授業」の構築 	
<p><課題との関連性></p> <ul style="list-style-type: none"> ○下位層の児童生徒への温かな支援（生徒指導上の居場所づくり） ○家庭学習の質の充実（授業と連動した内容の充実。ページ数などノルマ的な対応の撤廃） ○学校行事への対応の見直し及び欠時の改善 ○基本的な生活習慣の確立 	

求められる学力と授業

そのために

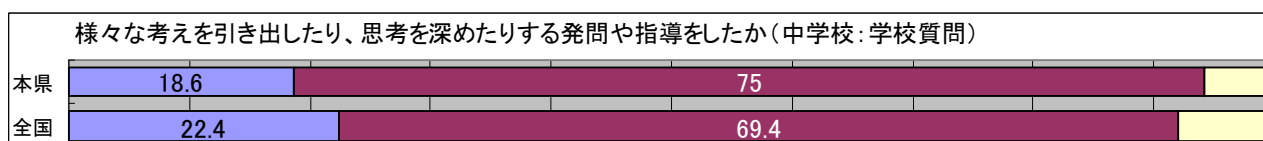
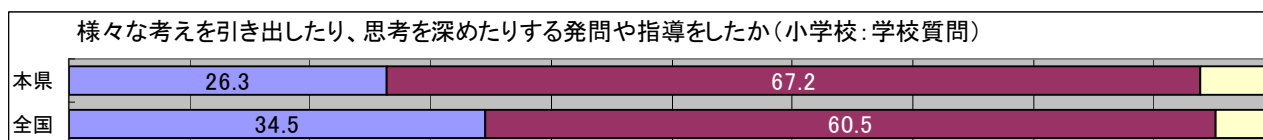
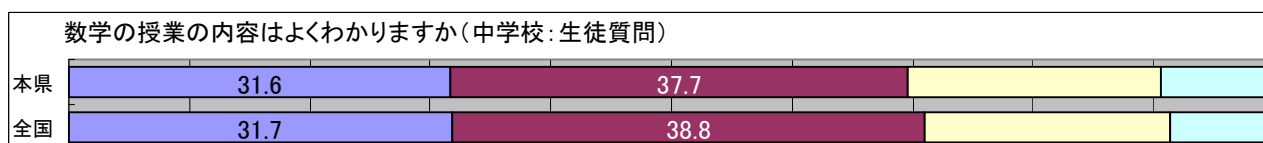
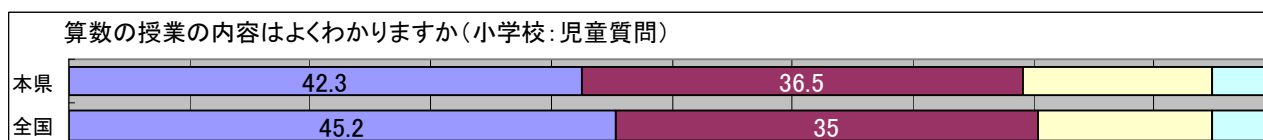
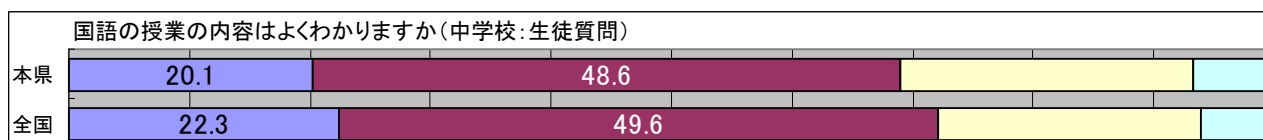
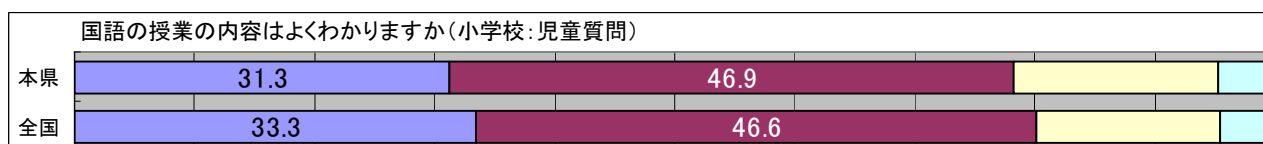
- 考え抜くことの楽しさや成就感・達成感を味わわせる授業
- 答えを導く過程を重視した授業（根拠に基づいた思考・判断・表現）
- 考えなどをノートに論理的にまとめる「書く活動」を重視した授業
※そのために、じっくり、根気強く考えさせる時間の確保が必要である。
- 考えたことを相互に「かかわらせる活動」を重視した授業
- 児童生徒が課題を主体的に解決する授業
 - ・ 討論等を通して推論し、解釈する力、反論などの活動
 - ・ 学習したことを根拠(事実等)に、意見を発表する活動(わかったことを他者に伝える力)
- 視覚に訴え、イメージを具体化するなど、ICTを活用した授業
- 本や雑誌・インターネット・新聞等多様な資料を活用する授業(調べ学習や読書活動)
※記述式問題への対応として、「意見の根拠が文章中・既習事項にあること」、「根拠と意見が論理的につながっていること」に着目させる。



IV 教材研究

教材研究は、学習内容を、児童生徒の実態を踏まえて、学習指導要領等に基づき咀嚼・解釈して、教え・学ばせる材料に仕上げるために行う。従って、各単元で、何を身に付けさせるか（いわゆるB評価）を明確にすることで、単元終了後の児童生徒の変容を具体的にイメージしながら分析することが求められる。それを曖昧にすると、学習のねらいが広がる傾向にあり、授業のスタートとゴールが不明確になって、児童生徒は何を学んでいるのか、何ができるようになったのかわからなくなってしまう恐れがある。

なお、児童生徒の実態が各学級や各年度で変わるため、常に、目の前の児童生徒の実態に応じた教材研究を充実させることが必要である。従って、ある学級で成功したからといって、他の学級でも同様の結果になるとは限らない。それ故、授業前の教材研究の有無や深淺が、授業の善し悪しを左右すると言っても過言ではない。



[平成25年度全国学力・学習状況調査から]

1. 教材研究の基盤

①児童生徒の実態把握

□レディネステスト、□プレテスト、□沖縄県学力到達度調査の結果、□全国学力・学習状況調査の結果、□標準学力調査等の結果から、児童生徒の既習事項の定着状況や学校としての実態を把握する。

既習事項の定着が弱い場合は、児童生徒の支援を事前に行い、基礎・基本を確実に身に付けさせてから本単元の学習に入る。なお、支援を施さずに単元に入ると、教える側の教師も習う側の児童生徒も多大な労力を必要とし、授業として成立することも難しくなる。

学校に保管されている教材・教具についても予め確認しておく。

2. 教材研究の流れ

①Point 1

「本単元で指導すべき内容」が示されている学習指導要領の指導事項との関連を押さえるとともに、本単元で「身に付けさせたい力」を明確に把握することが大前提となる。そして、学習用語や基本的な概念等についても確実に理解し、児童生徒にわかりやすく説明できるようにすることが基盤となる。

②Point 2

教材と向き合い、本質を押さえた上で、学習指導要領に基づき「身に付けさせる力」として学習評価（B評価）を設定する。そして、例えば、国語科の説明文であれば、「作者は何を伝えたいか」「伝えるためにどのような工夫をしているか」「文章はどのように構成されているか」「一番心を打たれた表現方法はどこか」等について、算数科の分数で言えば、「分数とは何か」「分数はどのような場合に使われているか又は便利か」「分数の計算で気を付けないといけないのは何か」等について、自分の言葉で簡潔にまとめると、授業づくりにぶれが生じない。

「身に付けさせる学習内容を『知っている』」だけでは、教材を研究したことにはならない。「身に付けさせる力」と「児童生徒の実態」をつなぎ、児童生徒一人一人の実態や目線に立って、様々な反応（どこに悩み、どのように考え、どのように解決するかなど）を熟考して、単元全体及び1単位時間毎の授業を構想することが教材研究である。従って、教材研究は、教師の目線ではなく、児童生徒一人一人の目線に立って行うことが基本になる。

③Point 3

本単元で確実に身に付けさせる学習内容をもとに、指導方法や手立、学習形態等について、児童生徒の実態（一人一人の顔を思い浮かべながら）を踏まえて練り、発問や説明、板書、ノート指導、演示方法などについて検討し、どの場面で、学習形態（個、ペア、グループ、全体など）を工夫するか十分に吟味する。主な発問や板書計画についても、自分なりに書き表してみると、授業像が具体的に浮かび上がってくる。

3. 教材研究のポイント

①目標に照らして学習内容を焦点化する

教材研究にのめり込むと、「これは教えないといけない」だけでなく、「それも教えた方がいい」「そうそうあれも教えるといいかな」などと、学習内容が広がり過ぎることがある。

研究を進める中で、このように広がることは悪くは無いが、学習のねらいが広がったままで終わってしまうことが課題である。広がった内容を再構成し、本時の目標（めあて・ねらい）に応じて焦点化することが大切である。

従って、常に、学習指導要領、児童生徒の実態、学習の目的・目標を踏まえ、学習内容を焦点化する必要がある。学習内容を「すっきり、明確に示し」、児童生徒に「じっくり考えさせ」学ばせたい。

②教材の在り方・生かし方

今求められている、多様な観点から考察する能力（クリティカルシンキング）に対応しうる教材になるように

- (1) リアリティがあり、課題を捉えやすい教材（明確性）
- (2) 既習事項を想起させ、挑戦したくなる教材（系統性）
- (3) 多様な観点から、捉えたり考えたりできる教材（思考性）
- (4) 文字が見やすく、内容が明確で、図や表などがある教材（視覚性）
- (5) 興味関心を高め、発展性のある教材（持続性）
- (6) 1単位時間の中で、活用できる教材（計画性）

4. 教材研究と年間指導計画の見直し

各教科の年間指導計画は、各学校の実態を踏まえて学校において計画しなければならない。そのため、単元テストや定期考査、沖縄県学力到達度調査や全国学力・学習状況調査の結果等から自校の成果と課題を的確に把握し、成果を伸ばし課題を解決するために、各教科の年間授業予定時数及び各教科の単元配列及び単元配當時数を検討する。

■改善のポイント

- ◎学校や地域の実態を踏まえた計画である。(変更箇所を朱書きにするなど工夫する)
- 各教科の年間指導計画は、学習指導要領に基づき、校長の指導を受けて計画する。
- 各教科の目標を明確にし、目標を実現するための配當時数を検討する。
- ◎児童生徒の実態を踏まえた計画
- 特に、課題がある教科については、配當時数を多めに計画する。
- 特に、各教科で課題のある領域や単元等については、配當時数を多めに計画する。
※学校及び学年全体で課題があるか、一部の児童生徒に課題があるかによって、配當時数は自
ずと変わる。
- 各単元で身に付けさせる学習内容を吟味し、習得型の内容か活用型の内容か見極め、それぞれの配當時数を検討する。
- 他教科等との系統性を考慮し、学びを実感させる計画を立てる。
- 地域の実態を踏まえて計画する。(地域の人材及び教育的資源の有効活用)
- 行事の内容を見直し、事前の取組(練習等)について適切に計画する。
※行事の内容、開催時期、練習期間等は適切か。

5. 教材研究の具現、週案の活用

各単元の教材研究は、該当する単元の前後の単元との関連も踏まえて単元全体を見通して行うことが重要である。従って、1単元当たりの指導時数が10時間程度であれば、期間的には2週間のスパンで計画を立てる必要がある。その具現化のためにポイントを絞ってまとめたものが週案である。週案には、計画の段階で、教科名、単元(題材)名、本時の目標(めあて、ねらい)、準備物などを、指導後には、本時の指導に関する評価やその後の具体的な児童生徒支援策などを記載する。どのような学力を身に付けさせるか(目標:B評価)、どのように身に付けさせるか(学習活動)、どのように評価するか(学習評価)、どのように支援するか(フィードバック)を明確にして、ゆとりある計画を立てる。

■改善のポイント

- 年間指導計画を踏まえ、計画的・意図的な計画になっている。
- 単元の目標等と児童生徒の実態等を踏まえ、無理のない計画になっている。
- 児童生徒のプライバシーに配慮しつつ、児童生徒の顔が見えるものになっている。
- 学年や教科のスタッフと調整し、校長等の指導を受けている。
※量及び質の確保について、自信を持って他者に公開し、評価を得る。

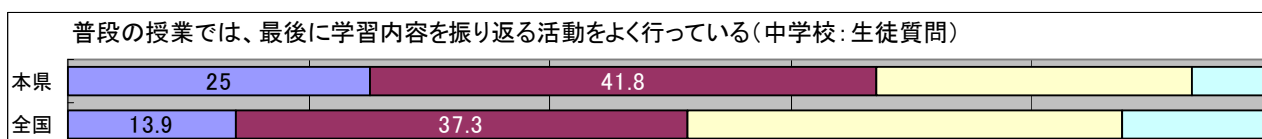
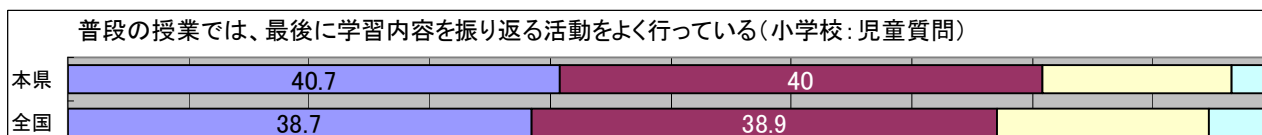
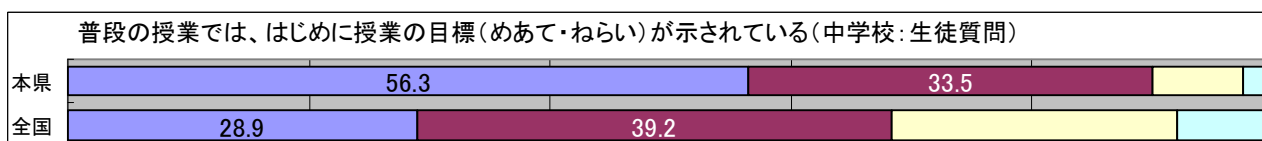
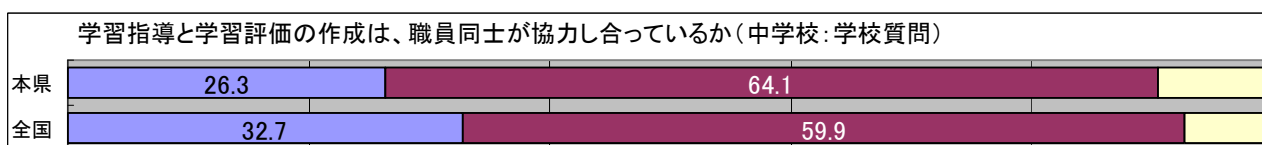
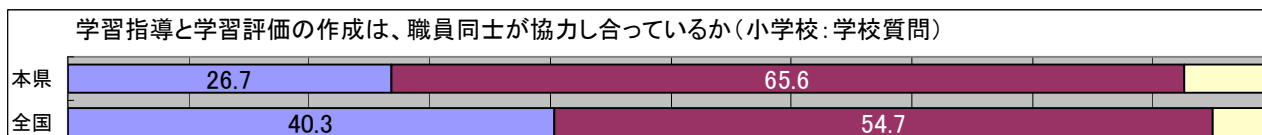


V 学習評価

児童生徒に確かな学力を身に付けさせるためには、教師一人一人が常に自らの授業力の向上に努め「わかる授業」を実践する必要がある。そのため、学習指導要領において言語活動の充実が示されるとともに、「学習評価」が重視され、各学校で評価規準を作成し、目標に準拠した評価を充実させるなど、指導と評価の一体化による授業改善の必要性を謳っている。

それらを踏まえて、学力の3つの要素や学習評価の在り方及び評価の基本的な4観点等に基づき、各単元の評価規準「B評価」を設定し、その達成のために、児童生徒一人一人の指導・支援を徹底する必要がある。

なお、学習評価を、単元テストや定期考査等の点数のみで行うことがあってはならない。常に、児童生徒一人一人がどのような状況にあるかを観点毎に把握し、適切に行うことが肝要である。



[平成25年度全国学力・学習状況調査から]

1. 学習評価の意義

学習指導要領における学習評価については、児童生徒一人一人の学習の確実な定着を図るため、目標に準拠した評価を引き続き着実に実施することが求められている。また、学習評価をその後の学習指導の改善に生かすことや学習評価の妥当性、信頼性を高めることも一層重視されている。

なお、評価の基本的な4観点は、「関心・意欲・態度」、「思考・判断・表現」、「技能」、「知識・理解」であり、学習に入る前に、この4観点についても事前に実態を把握し、評価しておくこと、今後の支援をはじめ、授業づくり等の充実につながる。

なお、学習評価「B評価」の設定に当たっては、国立教育政策研究所教育課程研究センターが発行した『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』等を用いて、全職員で検討し、設定することが必要である。

2. 指導と評価の一体化

「指導と評価の一体化」については、評価スパンとして、年度や学期、月、週、1時間単位で捉え実践している教師が多いだろう。勿論、それでよいが、実は、評価は、1単位時間の授業のなかでも、認め、励まし、褒めるなど無意識のうちに何度も行われている。児童生徒を受け入れ（受容性）、善し悪しを明確に示し（基準性）、意識を高め、次なる取組に生かせる（方向性）教師が、洞察・掌握・統率力があり、児童生徒一人一人を確実に伸ばすことのできる教師であるといえる。単元全体は勿論、各1単位時間においても評価規準「B評価」を設定し、それを全児童生徒に確実に身に付けさせることが強く求められている。

そのために、常に自らの授業を振り返り、評価して、今後の対応や次なる授業における指導方法について様々な観点で試行錯誤しなければならない。それが自らの授業力を高め、学習内容を児童生徒に確実に身に付けさせる手立てとなり、目の前の児童生徒を確実に成長させる実践となる。

3. 診断的評価の位置付けとフィードバックの機能化

各単元のスタートは、全ての児童生徒を同じスタートラインやステージに立たせて行うことが基本になる。スタートの位置やタイミングがバラバラだと、相互に学びを高めることはできない。そのため、基礎・基本が身に付いていない児童生徒への支援を徹底してから本単元に入ることが必要である。（支援の時間確保及び指導計画への位置付け）

4. 形成的評価と総括的評価の位置付けとフィードバックの機能化

- 学習の状況を随時把握し、その都度適切に対応することが必要である。
総括的評価後も状況に応じてフィードバックする。未定着のまま次の単元等に進むことがあってはならない。（何を、どのように評価するか、どのような評価方法「絶対評価、個人内評価、相互評価等々」にするかなどを、明確にしておく）
- 遅れやつまづきを的確に把握し、具体的な支援を徹底する。
＜各教師が確実に実践すること＞
 - ・毎時、毎日、評価すること（評価内容・評価方法及び還元時期・方法を決定）
 - ・一定のスパンで評価すること（評価内容・評価方法及び還元時期・方法を決定）

①「わかる・できる」こと

- 「わかったか・できたか」の確認をどのようにするか。
 - ・形成的評価により、各単元内の学習理解・習得の状況（遅れやつまづき）を把握する。
※日々の授業での評価や定期的な評価を工夫する。
 - ・総括的評価により、各単元及び一定期間（中間・期末考査等）の学習理解・習得の状況（遅れやつまづき）を把握する。
- ※評価は、「～ができない」というものではなく、「～の指導が徹底していなかったため～が身に付かなかった」という結果責任の視点で行うことが大切である。

②「わかること」と「授業への参加意識」・「授業の楽しさ」

- 「授業への参加意識」や「授業の楽しさ」は、児童生徒の「学習内容がわかること・できること」と密接に関連する。「参加型」や「楽しさ」を意識した授業において一人一人の児童生徒が「学習がわかる」という要素は重要である。
また、友達と協力し合って「問題を解いた」や「仕上げた」「ゲームに勝った」なども、楽しい授業の要素となる。

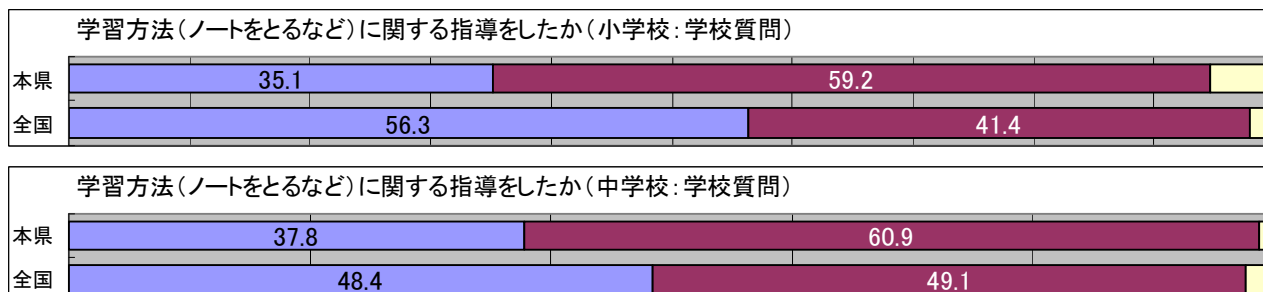
③「わかること」を確かにする支援

- 「わかったことは何か」を確かめる支援をする。（考え・思考の整理）
- 意見を述べる際は、学習したこと、事実、教科書や資料等書かれていること、自分自身の経験等を根拠としているか確認する。
- 意見については、根拠をもとに、根拠と意見が論理的につながるよう支援する。

VI 学習方法

学習方法の定義は、一般的には「習得する（学ぶ）ための方法」と捉えることができ、目的・目標までのプロセスで捉え述べられたり、期間（短・中・長）で学習内容を身に付ける方法で述べられたり、ひと・もの・こと等との関わりで述べられたりするなど多岐にわたる。

本項では、定義にとらわれず、授業を中心に学習内容を身に付けさせるための方法に絞って述べる。授業づくりの際の具体的な手立てや学習（指導）方法として参考にしていただきたい。



[平成25年度全国学力・学習状況調査から]

1. 効果的に身に付けさせる一方策

基礎的・基本的な知識・技能を身に付けさせるための方法として、一つのスキルを繰り返し取り組ませ身に付けさせてから、次のスキルを身に付けさせるという段階的な方法もあるが、一つのスキルに関連する他のスキルを絡めて取り組ませる方法もある。児童生徒の実態にもよるが、後者の方がより効果的に身に付くと言われおり、このような取組を継続して積み重ねると、物事を関連付けて捉え、考えるなど、一つ一つを別々に覚えさせるより、はるかに大きな成果が得られると言われている。

ただ、そのような学習方法は、児童生徒一人一人の実態によるので、関連付けるスキルは最初は少なめからはじめ、徐々に増やしていくことがよい。

上記のことは、基礎的・基本的な知識・技能と、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育む際も同様である。今まさに、単元を貫く言語活動を明確にし、それに基づいて、習得と活用のバランスを考慮して授業をつくることが求められている。

2. 授業づくり及び実践の段階で重視したいこと

教師の表情や声の大小・質等も授業の善し悪しを大きく左右する。受容的・共感的な態度で接し、声の大小や強弱に配慮するだけで、児童生徒の関心を引き付け、学習意欲を高め、学びたい雰囲気を創り出すこともある。

逆に、威圧的な態度で、大きな声で話し続けると、最初は聞くが、心を寄せて聞いているわけではないため、徐々に教室全体の雰囲気に落ち着きがなくなり、学習に集中しなくなる場合もあるので要配慮である。

1) 授業過程における5つの視点

①「教える」こと

- 学習指導要領に示された内容（基準）をしっかり教える。（教え漏れがないこと）
 - ・毎時間の授業で教えること「基礎的・基本的な知識・技能」を明確にする。
 - ・どの場面で、何について習得させ、思考・判断・表現させるかを明確にする。
- 「しっかり教えること(指導)」と「寄り添うこと(支援)」を明確にする。

②「気付かせる（つなぐ）」こと

- 教えることを児童生徒に「気付かせる」ように工夫する。（成就感・達成感）
 - ・既習事項「基礎的・基本的な知識・技能」に着目させたり、既習事項との関連で説明したりすることで、関連付けて思考する習慣や力を育み、「考えたい・できるようになりたい」という気持ちを高めたい。
- 自力解決等の時間と発言（意見交換）の時間を確保する。
 - ・個々の能力を最大限に生かし、根拠を探し求め、じっくり考えさせる態度を育成する。
- 発問しながら、児童生徒一人一人の表情等を注視し、発問の意図を理解しているか推察する。
 - ・発問の意味を分かっていると判断した場合は、根気強くじっくり考えさせる。状況を読み違えて、発問や説明を繰り返すと、児童生徒のやる気を損なったり、考える意欲を削いだりすることがある。
 - 直ぐに発問し直したり、説明したりするのではなく、我慢強く時間を確保してじっくり考えさせることが、児童生徒の成就感や達成感につながる。

③「定着する」こと

- 診断的評価において課題を把握し、児童生徒個々の支援を徹底する。
 - ・その際、上位層の児童生徒をリトルティーチャーとして活用することで、全体的な底上げを図ることも考慮する。
- 授業や補充学習、家庭学習等によるドリルや繰り返し学習を充実させる。
- 「定着」を図るための日々の取組、定期的な取組を充実させる。
 - ・特に、学習の定着が弱い児童生徒に対しては、基礎的・基本的な課題を宿題として課し、それを授業で活用することで、児童生徒の基礎学力の定着と学習意欲を高めたい。

④「活用する」こと（活用せざるを得ない状況・活動の工夫）

- 学習したこと・わかったこと（事実、書かれていること）などをもとに、他の学習内容と関連付けて思考・判断したり、実生活の事象と関連付け活かしたりする（関連付け）活動を工夫する。
- 学習内容は、各学年の発達段階を考慮して系統的に配置されており、新たに学ぶ学習内容は、常に既習事項を土台として存在していることを押さえる。
 - そのことを踏まえ、教材研究を徹底し、授業をつくる。

⑤「楽しい」こと

- 「わかる」「できる」「自分の考えが言える」「仲間と学び合える」などに支えられた児童生徒の学ぶ楽しさを重視（学ぶ意欲の高揚）した指導を充実させる。
 - ※人は褒められると嬉しくなり、期待されるとそれに応えようとする。それらを上手に使い分けることで、授業は「楽しい」を実感させる。

2)「わかること」と「参加する授業」・「楽しい授業」の実践

①わかる授業をつくる「発問」の機能

発問は、学習の理解に向けて、児童生徒に思考する契機を教師の側から創り出すなど、重要な機能をもっている。知識と知識を結びつけ深めるため、思考を促す発問を工夫する。

- ◎学習のねらいに迫る「発問」になっているか。
 - ・活発な発表が繰り返されても、本時の目標（めあて・ねらい）を達成するための活動でなければ意味をなさない。思考を深め、授業をよりレベルアップする発問にしたい。
- ◎テスト等の記述無し（無解答）に対する指導・支援になっているか。
 - ・日頃から、授業では「まちがっても大丈夫」の雰囲気をつくる。
- 「まちがった」ことを指摘するのではなく、「まちがった」ことを新たな課題の提供として称え、全員で追究する活動を重視する。
 - ・「問題を解く意欲がない」児童生徒への対応（かかわり寄り添う支援）

②児童生徒の考え（発表）を引き出す工夫

日々の授業が、教師の一方的な授業であったり、児童生徒のみの授業であったりすると、児童生徒の思考は深まらず、発表しなくなる。授業は、教師と児童生徒の相互作用で成立するものであることから、児童生徒が積極的に発表できるようにするため、教師が発表の機会を準備し、児童生徒に一日に少なくとも一回は意図的に発表させる。そのため、日頃から問答的な学習指導を継続し、その中で発表内容を褒めたり、板書として取り上げたりするなどの細かな手立てを仕組み、積み重ねていくことが大切である。

このことを踏まえ、児童生徒の発表を引き出すための基本としては、次の3点を挙げることができる。

- ・考えさせる内容によって発問を工夫しているか。
- ・児童生徒の考えを交わらせ・関わらせる工夫があるか。
- ・支持的風土のある学級の雰囲気醸成しているか。

③わかる授業をつくる「説明」の機能

教材内容の提示や理解方法の提示などの機能があり、重要なところを明確に示したり、既習事項と関係付けたりすることで、伝えたいことを児童生徒一人一人に具体的にイメージさせることが必要である。その充実を図るためには、段階的に順序立てたり、教具を工夫したり、教育機器等を活用したりするなどの工夫が必要になる。特に、既存の知識・技能や経験の乏しい児童生徒への配慮は必要であり、説明の準備や説明力が求められる。

④わかる授業をつくる「板書」の機能 ※「書くこと」との関連を重視すること

児童生徒に、1単位時間の授業や単元全体の学習内容及び進め方等のイメージをもたせることは、学習の理解や意欲に大きく影響する。児童生徒は、板書をもとに個々のペースで知識と知識をつなぎ、思考を深め、理解・認識を深める。教師の板書は、児童生徒一人一人が学びの前後を自分のペースで振り返り、再確認する手立てにもなる。

このことを踏まえ、「板書が児童生徒にとって有益であったか」の視点で、自らの学習指導の過程を振り返り、板書を改善していくことが必要である。

■板書で最低限必要とする事項

- 単元名・題材名 本時のめあて（子どもが目標化できる表現） 課題（考え・学ぶ内容）
- 学習内容 ※ 児童生徒の考え（「学習内容の系統や思考の流れ・構造」）
- 本時のまとめ ※は教科や学習内容の特性による

■板書の際の留意点（板書≒ノート指導）

- 筆順、文字の大きさ等に配慮して、丁寧に書く。
※筆順が違っていった場合、児童生徒は無意識のうちに教師の筆順を正しいと思い込む危険性がある。
- ※特に、小学校低学年においては、児童のノートのマス目と同様の黒板を用いて書く。
- 書く内容によってチョークの色を決め、児童のノートまとめの際も同様の色で書かせる。
- 線は、定規等を使って丁寧に引く。

ねらい	内 容
学習目的の提示	明確なめあての意識化、学習内容や解決方法の可視化・具体化
情報交換	事実・結果、発言内容等のポイント、思考の過程、多様な視点や対立点などの交換
論の構成	見方や考え方を生み出す発問や資料、操作活動の結果、集団思考の活用
方法の習得	留意事項、学習過程の理解と定着、技能・表現・学び方の定着

⑤わかる授業をつくる「ICT」の活用

電子黒板やコンピュータ、タブレット、デジタルカメラ、実物投影機、デジタルテレビ、プロジェクターなどのICTを活用した授業は、児童生徒の興味関心を高めやすく、多くの情報を瞬時に提供することができるなど、無限の可能性を秘めていると言っても過言ではない。そのような長所を生かして、目的に迫るためのツールとして効果的に活用することが必要である。

なお、ICTによる授業は、授業の善し悪しに関わらず、他者から見て「よい授業」として写りやすく、使うことが目的化する場合があるため、十分留意する必要がある。

<ICTの効果>

- 情報を一つの画面に瞬時・連続的に提示できる。(集中力の維持)
 - 生きた情報を提示できる。(リアルタイム、動的など)
 - イメージを共有できる。(比較・検討、体験の想起など)
 - 鮮明な画像により視覚化できる。(科学的な目、別次元からの目など)
 - 手元にある情報から予想・仮説を容易に立てることが可能である。(グラフなど)
 - 用いた情報等を保存・再生できる。(振り返りなど)
- 上記の効果は、教師の側、児童生徒の側の双方から言える。

⑥わかる授業をつくる「書く活動」の機能

○「書く活動」を充実させることで、基礎的・基本的な知識・技能、思考力・判断力・表現力等、書く意欲、書く力、我慢強さ等が身に付く。何を、どのように書けばいいのか、目的意識をもたせて書かせることが重要である。

○ノート指導を徹底する。(各教科に応じたノート指導の工夫)

○目的に応じて描かせる内容を精選し、徹底する。(予想、結果、考察、まとめ、感想等)

○書く意欲の高揚を図る授業を意識する。(日々の実践で)

○「書写指導」の充実を図る。

※小・中における日記の取組による改善

<「ワークシートを活用する授業」の留意点>

「ワークシート」はその便利さの反面、授業の流れのなかで、学習内容を関連付けたり、創造的に書き込んだりする活動等のはたらきを弱くすることがある。(穴埋め)問題の場合は、用語の習得にはよいが、概念を捉えさせる活動には好ましくない。何れにせよ、目的を見極めて活用する必要がある。

ノートの機能や働きについて、『新教育学大事典』(第一法規)では、次の6つを挙げている。

記録的な働き	教師の板書、調べたこと、聞いたことなどをメモする。
考えの整理・焦点化	書くことによって自分の考えを整理し、まとめる。
言語機能のトレーニング	計算や書き取りなどの練習をする。
自主的な学習を進める	思考の過程や学習の足跡を整理・保存する。
自己評価に生かす	教師が学習の評価をしたり児童生徒が自己評価をしたりする。
予習・復習に生かす	授業と家庭学習の間をつなぎ学習の定着を図る。

これら6つの機能や働きから、児童生徒が意欲をもって学習に取り組むためには、探究的・整理的・評価的なノート指導が必要であることがわかる。これまでは「板書を写す」「言われたことを書く」といった受動的なノートが多かったが、これからは、児童生徒が自ら書き方や内容などを工夫して、書くことの楽しさを味わい、今後の学習に生かすようなノート指導へと転換することが求められている。

<改善のポイント>

①ノートを書くときの約束を決める

各学年の年度初めにノートの書き方・形式等の約束を決め、ノートの重要性やこれからの学習に向けての心構えをつくる。

*小学校(低・中・高学年)、中学校、高等学校の児童生徒の実態に合わせて約束を決める。

②ノートの主体的な活用を促す

児童生徒の「書きたい」という意欲を大切に、書くことの楽しさを味わわせる活動を取り入れる。

<活動例>

- ・赤や青などのペンを使って、見やすく工夫させる。(色は3色以内がよい)
- ・イラストや吹き出しなどを使って、考えやまとめを工夫させる。
- ・ノートに主人公を登場させ、他者が自分に言い聞かせるように工夫させる。など

③教科ごとの学習の進め方を知らせる。

④的確な賞賛・指示を与える。

- ・「書こうとする意欲」「書く態度」「書いた内容」「成長したこと」を褒める。
- ・学習後の児童生徒のノートにコメントを書くことで、児童生徒の書く意欲を高める。
- ・分かりやすいノートにするために、的確な指示を与える。
- ・「自分が考えたことは、別枠で囲む」「学習中、疑問に思ったことをコメントする」「今日の学習のポイントを書く」
- ・児童生徒が書いたノートの内容について、「いいところに気がついたね」「よく理解しています」等の賞賛を行い、ノートの整理的機能を高める。

⑤教師及び児童生徒の視点で評価する。

- ・教師側の評価：児童生徒のノートから授業を考察・反省し、次の授業に生かす。
- ・児童生徒側の評価：学習したことや書き方を振り返ることで理解した内容及び学び方の習得などの進歩の状況を確認する。

⑦下位及び中位の児童生徒の支援

○遅れへの対応と補充学習時間の確保

- ・算数・数学のもととなる「かけ算九九」や「四則計算」などの定着の徹底
- ・国語における漢字の書き順（筆順）や語句の意味などの定着の徹底
- ・「学習の遅れ」のある児童生徒に対する「授業中」と「授業外」の具体的支援の徹底

○現在学んでいる学習の補充の徹底（ドリル問題や形成確認問題等の活用）

- ・内容面への対応（課題のある学習内容へのきめ細かな対応）
- ・時間的な対応（授業時数や補充時間の確保・実施）
※「勉強がわからない」、「授業が自分の理解や作業の速度に合っていない」などの状況では思考意欲や発表意欲などの学ぶ意欲は益々低下する。そのようなことが生じないように、該当する児童生徒への配慮を徹底する必要がある。

3. 授業の基盤となる支持的風土づくり

児童生徒同士が自分の考えや思いなどを本音で語り合える支持的風土づくりは、個々を大切にしている学級経営の充実が基盤となる。特に学習時においては、「自分の考え（言っていること）を理解してもらえる」「友達の考え（言っていること）が理解できる」という部分を大切にしているこそ、自尊感情を高めていくことができる。

この高まりが児童生徒の主体的な意欲や、周りとのよりよい関係を生み出させるもととなる。温かい人間関係を築き、授業の中で互いに相手のよさを認め合って個々の考えなどをかかわらせるならば、授業はより一層深まり、共に伸びる学習集団を形成していくことにつながると考える。

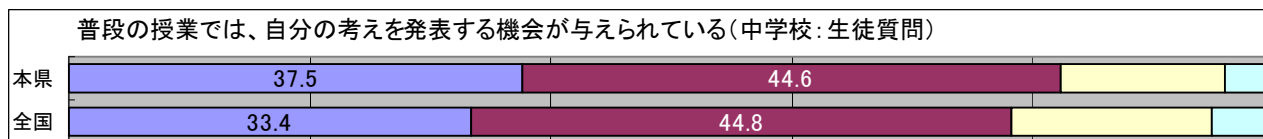
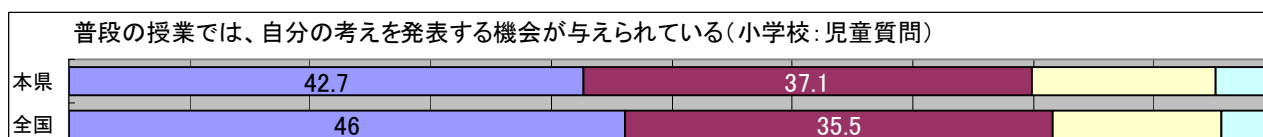
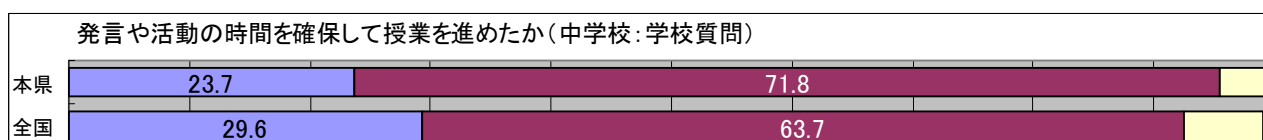
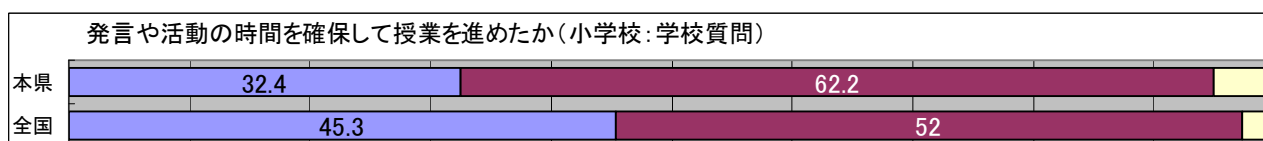
- ・話を聴く（＝相手や相手の考えを尊重する）態度は身に付いているか。
- ・相手の考え方等のよさに目を向ける見方・考え方が身に付いているか。
- ・一つの事柄に対して、多面的な見方・考え方ができるか。（クリティカルシンキング）
- ・教師は児童生徒の実態把握と教材研究を十分行い、学習への準備を整えているか。
- ・児童生徒の実態にあつためあてを立て、主体的に学習に臨めるようにしているか。
- ・発問、説明、板書計画、ノート指導など学習方法に係る対応は効果的か。

Ⅶ 学習形態

学習形態には、一般的に、一斉学習、個別学習、ペア学習（2人）、グループ学習（3～6人程度）などがあり、集団で意見を交わし合い課題を解決する場面や上位層と下位層の児童生徒を意図的にかかわらせることで下位層の児童生徒を支援する場面など、学級の実態によって多種多様の取り寄せ方がある。

その点で、児童生徒の座席及び座席の形状も大きなポイントを占める。学級の実態や学習内容等により、一般的な型（全員が黒板を向き、1列に並んだり、2列毎に並んだりする形状）や、放射線型（教卓を円の中心にして半円形に広がる形状）、コの字型（児童生徒がコの字型に向き合う形状：黒板を真横にする児童生徒がいる）など、効果性を考慮して配置することが求められる。

一つの形状に拘らず、教科の特性や学習内容等を踏まえて、本時の学習目標を達成するために、より効果的な形状を模索する必要がある。



〔平成25年度全国学力・学習状況調査から〕

1. 「わかる授業」をつくる学習形態

①わかる授業をつくる「個別学習」の機能

- 児童生徒個々のペースを重視し、個々の実態に応じた課題に取り組ませることで成就感を味わわせるようにする。
 - 児童生徒個々の能力を最大限に出し切って、課題に向き合わせ、粘り強く課題解決に取り組ませるようにする。
- ※粘り強く取り組ませるためには、激励、助言、賞賛など、教師の適切な支援が必要である。

②わかる授業をつくる「ペア学習」の機能

- 学級における基礎集団として、隣同士のペアがある。隣同士は、常に隣にいるということで比較的話しやすい雰囲気を醸し出す。ペア学習は、その長所を生かし、自分の考えを伝えたり、隣のペアから意見をもらったりする活動としては有効である。
- 隣同士なので大きな声を出す必要もなく、発表への不安を解消したり、短時間で学級全員に自分の考えを発表させたりすることができるなど、工夫次第で効果を高めることができる。

③わかる授業をつくる「かかわり合い」の機能

児童生徒が、学習したことを根拠(事実等)にして他者に考えを伝え、比較・検討、討論等を通して推論したり解釈したりして、活用する力などの向上を図る。

- 学びにおいて、他者とのかかわりのなかで関連的、比較的、批判的、あるいは多角的・多面的な意見による練り上げを経験することは重要な意味をもつ。集団で考えを構築すること、深めること、他者の多様な見方・考え方の相違等を学び、自分自身の考え・意見をもつことができるようにする。(信頼・協力・共同)

2. 交流活動を活性化するための基盤

- 共通の体験や学習の経験がある。
- 互いに情報交換の必要性に迫られている。目的が一緒
- 互いに対等の立場で話し合える。
- 学習の継続や発展が期待できる。

3. 交流活動を活性化する工夫

交流活動の基本となる「話し合いの仕方」を指導する際には、他者の発言内容を自分とのかかわりで聞きながら、発言するための内容を整理させるようにすることが重要である。先に発言した人とこれから発言しようとする自分との違いを絶えず比較させるようにし、先に発言した人との内容を「同一」「追加」「再比較」「理由」「追究等」の視点で常に意識させ、集団を意識した発言形式を身に付けさせるようにする。交流は集団思考の一形態であるので、このことを踏まえ、交流活動の活性化を図る視点として、次の3点を挙げる。

- 交流活動を活性化するための、話し合いの約束等が確立されているか。
- 交流活動を活性化するための、話し合いの準備が十分になされているか
- 交流活動を活性化するための、話し合いの形態が工夫されているか。

4. 交流活動を活性化するための形態の工夫

○交流活動のための資料・教具・表現物

- ・調べ学習の場合
 - 四つ切り画用紙や模造紙に整理した物
 - 切り抜き、抜き書き等のスクラップ(フラッシュカード)
 - 学校図書からのコピー(コピー、OHP等)
- ・体験学習の場合
 - 活動場面の写真や用いた道具、採集した物
 - 体験学習で制作した具体物(実物)
 - インタビュー場面のVTRや写真
- ・探究学習の場合(探求学習)
 - 探究結果の図表、グラフ、まとめ等(フラッシュカード)
 - 一連の探究の過程を示した絵図と結果及び考察等(研究物)
 - 実物実験で提示

○交流活動のための学習訓練

- ・電子黒板やコンピュータ等の機器の使用方法に慣れさせる。
- ・実験や観察の結果の整理や結論の出し方や発表に慣れさせる。
- ・話し合い・聞き合いの方法に習熟させておく。
- ・実物を見せて相手を説得する方法に習熟させておく。
- ・相手の心情を推し量る人間性を育てておく。
* 日頃の学習で視聴覚機器等のメディアを使って、説明する習慣を付けさせておく。

Ⅷ 学習を支える力の育成と学習規律の徹底

「確かな学力」の向上を図るためには、「新しいことを学ぶ、わかる・できる、つかう・定着する」ための学習活動を展開する必要がある、日々の授業の充実を支える、家庭学習の習慣化も重要な取組の一つである。学力の上位層の児童生徒は、「何をどのように勉強したらよいか」などがわかっており、新しく学んだことを既習事項と関連付けるなど、主体的に学習に取り組むことができる。しかし、下位層はその点で弱い。学校と家庭の学びの往還による効果的な学習活動が展開されれば、授業もより充実し、下位層の児童生徒も上位層の児童生徒と同様の思考方法を身に付けるようになる。そのため、学習を支える力を育む指導を学校、家庭・地域で粘り強く取り組む必要がある。



〔平成25年度全国学力・学習状況調査から〕

1. 「学習を支える力」と「学習規律」の捉え

＜社会全体＞（学習を支える力）

□他者を思いやる心（相互の信頼関係）、規範意識・マナー（同異を認める心「いじめを許さない」）、あいさつ、返事など

＜学校＞（主に学習規律）

□学習用具の準備、□時間を守る
□学習態度、□話す・聞く態度、
□書く・読む態度、□整理整頓、
□机や椅子の整理、など

□家庭学習の充実
□学習用具の完備
□時間を守る
□整理整頓 など

＜家庭＞（主に学習を支える力）

□家庭学習時間の設定・確認
□学習用具の準備についての確認
朝食、家族団らんの充実
□配布物、提出物の確認 など

2. 「学習規律」の徹底

学習規律は、学級集団の中に自然発生的に確立されるものではない。意図的・計画的に教師が指導することが必要である。学習規律を身に付けさせる初期には、望ましい学習規律を教師が示して（率先垂範）守らせる。そして、児童生徒の発達の段階に応じて学習規律を受容させるようにしていく。最後は、児童生徒自身が学習規律を自発的につくるように指導する。学習規律には、個人の学習規律と集団としての学習規律とがあるが、その内容は、発達の段階により多岐にわたる。

①学習用具の準備

授業が終了した時点で、学習用具を片付け、次の授業の準備をさせ、学ぶことへの意識を高めることで、時間を守る（チャイム・ベル）ことを意識させる。

学習用具が揃っていない（忘れる）児童生徒については、一つでも準備していれば、それを褒め、忘れた用具について根気強く対応する。家庭と連携して取組が必要である。

②授業開始・終了時刻の徹底

「授業を開始時刻に始める」ことは、児童生徒の学校での生活リズムや時間に対するけじめを身に付けさせる上で重要であり、「授業を終了時刻どおり終わる」ことは、児童生徒が集中した中で授業を進めることができ、時間を大切に使うようになる。

③学習態度の指導

授業の開始前に机や椅子を整え、姿勢を正すことは、休み時間と授業の区切りを明確にするとともに、児童生徒の気持ちを学習に向かわせる効果がある。

授業中の態度（姿勢、返事、話す・聞く態度、書く・読む態度など）についても、常に意識して指導することで、学級全体として学ぶ雰囲気が高まり、学習効率も高まる。

■個人の学習規律

- ・ 授業を受ける心構えとして、始業のチャイム前に席に着かせる。
- ・ 授業に必要な学習用具を机の上に揃えさせる。
- ・ 望ましい姿勢、返事、話す・聞く態度などを意識させる。
- ・ 他者の発表に共感・批判しながら聞かせ、重要事項をノートにまとめさせる。
- ・ 学習中は他者の迷惑にならない言動をさせ、相手の考えを受容しながら学び合わせる。

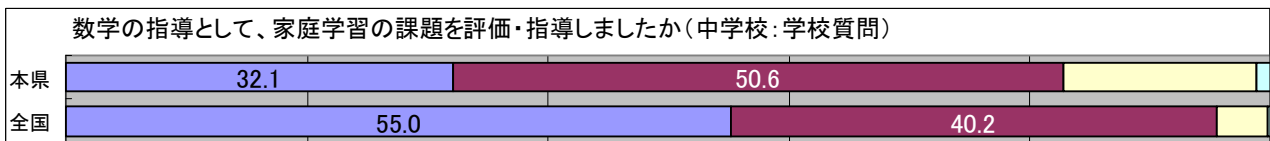
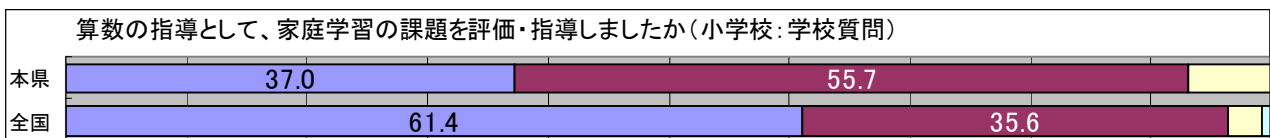
■集団の学習規律

- ・ 各教科の特性と学び方に基づき、学習用具や小集団活動及び学習活動の場を整えさせる。
- ・ 価値の高い目標を目指して集団思考させ、新しい概念を生み出す学習習慣を身に付けさせる。
- ・ 他者と協力・協調することを重視し、相手の立場を理解して発言、行動させる。
- ・ 学習場所の違いに応じた学習方法を理解させ、決められたルールに従い行動させる。
- ・ 学級集団として行う日常行動は、規則正しく実行させる。
- ・ 教室を移動する際も、机、椅子などを常に整えさせる。

3. 「学習を支える力」と「学習規律」の取組例

各教科等によって、学習規律に若干の違いはあるが、下の取組例を参考に、全職員で自校の実態に応じた「学習を支える力・学習規律のポイント」を作成し、推進する必要がある。

	児童生徒	教師	保護者
登校前	進んであいさつ 学習用具の準備・点検	あいさつ（率先垂範） 学習用具の明示（前日に）	あいさつ 声かけ・確認、朝食
登校中	進んであいさつ	あいさつ	
登校後	教科書・ノートなどの準備 提出物・宿題等の提出 朝の活動（読書、ドリル）	何をどこにしまうか明示 提出場所の明示 何をどのようにするか明示	
授業前	黒板などを整える 学習用具の準備 チャイム・ベルが鳴り終わるまでに着席 机や椅子を整える	明確な役割：係活動・日直 チャイム・ベルの前に入室	
授業中	授業開始のあいさつ 本時のめあての確認 学習態度 話す（発表）・聞く態度 書く（ノート）・読む態度 ・・・ ・・・	気持ちよく始められる雰囲気づくり 本時のめあての明示 学習態度の指導徹底 話し方・聞き方の指導徹底 ノート等・読み方の指導徹底 ・・・ 授業と連動した「宿題」	
授業後	次の準備をして休む 机や椅子の整理		
帰宅後	家庭学習（宿題） 学校の出来事などを家族に話す		声かけ・確認・サイン等 家族回らんの充実



[平成25年度全国学力・学習状況調査から]

4. 「家庭学習」の充実

○授業と連動した「宿題」を与える(復習・予習に取り組ませる)

授業と連動した「宿題(課題)」を与える(復習・予習に取り組ませる)ことは、児童生徒に基礎的・基本的な知識・技能を身に付けさせるとともに、学習意欲を高めたり、規則正しい生活リズムの形成や保護者の意識の高揚につながったりする。

また、宿題を次時の授業等で確認・点検・評価・指導するなど、授業で生かすことで、家庭学習の取組に成就感を味わわせることも考慮したい。

小学校は、学級担任が殆どの教科を担当していることから、一冊の「家庭学習帳」で取り組ませることは問題ない。しかし、中学校は、教科によって担当が違うため、各教科の「学習ノート」で取り組ませることが効果的と考える。その方が、期中におけるノート点検(評価)において、授業中のノートまとめや家庭での取り組み方などについて一括して効率的に評価できる。

なお、中学校において、一冊の「家庭学習帳」を活用する場合は、全教科の授業に持参させるなどの工夫が必要である。

- ・一人一人、段階的に取組を深める。(内容面、量の面等)
 ※学習が定着していない児童生徒へは、課題を与えたり、声かけしたり、点検し賞賛したりするなどの細かな配慮を徹底する。
- ・家庭学習で「復習」に取り組んでいる児童生徒は学力が高い傾向にある。
- ・予習は、自らの課題を認識させ、次時の学習に向かう姿勢を養うなど、学習意欲を高める効果がある。しかし、宿題として課す場合は、学力の上位層と下位層の児童生徒では、取り組みませ方が違うことへの配慮が必要である。

5. 保護者への周知及び協力体制の構築

「学習を支える力」のうち、特に「家庭での学習」や「学習用具等の準備」の習慣化は、学校教育だけで習慣化を図れるものではない。これらについては、保護者にも随時、粘り強く周知を図り、連携した取組を推進する必要がある。

そのためには、保護者が子どもへの具体的な支援ができるよう学校方針等をまとめた『家庭学習の手引き』を作成し配布するなどの手立ても有効である。

なお、「確かな学力」の向上を図るための「学習用具等の準備」は、個々の児童生徒の1単位の授業全ての取組に影響する。学習の準備が日々できていない児童生徒に対しては、個別指導や家庭との連携協力のもとに改善を図っていく必要がある。

○教科書、ノート、筆記用具、資料集等、その他の準備

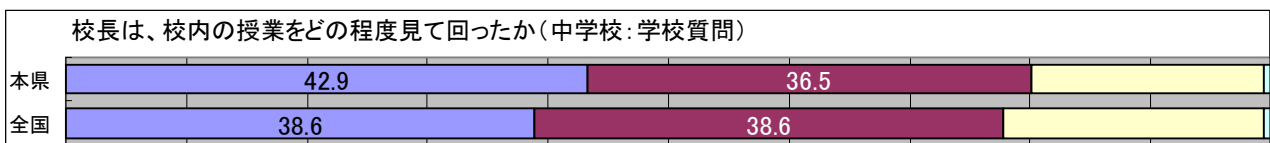
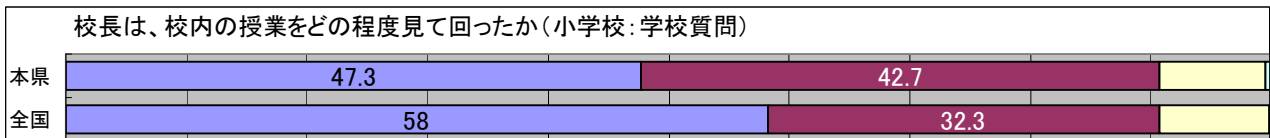
◎前日かその日の朝に、学校に持って行くものを確認している児童生徒は学力が高い傾向にある。

Ⅹ 校内研究

一人一人の教師が学校としての共通した課題や自らの課題を認識し、全職員体制で確かな学力の向上「わかる授業の構築」に取り組むためには、現状の成果や課題を全員で確認し共有することが必要である。その中から、何が課題なのか、どのように改善を図るかなどの方策を見出していく組織的な体制を構築する必要がある。

なお、教師のポテンシャルを引き出し、モチベーションを高め、共通事項の確認に基づく、全職員体制による取組を推進することは、校長、副校長、教頭の重要な職務である。

※「各学年・学級、各教科で頑張ってください！」では、効果性は低い。



[平成25年度全国学力・学習状況調査から]

1. 診断的評価、形成的評価、統括的評価及び諸調査の結果の活用

早い時期のフィードバック

学年度や各学期の早い時期や単元に入る前に行う診断的評価や単元内に行う形成的評価、単元終了後や定期考査等で行う総括的評価後は、直ちに、自らの指導法について評価する（見直す）とともに、定着がよくなかった内容については全児童生徒を対象に、定着がよくなかった一部の児童生徒に対しては授業やその他の時間で確実にフィードバックする。

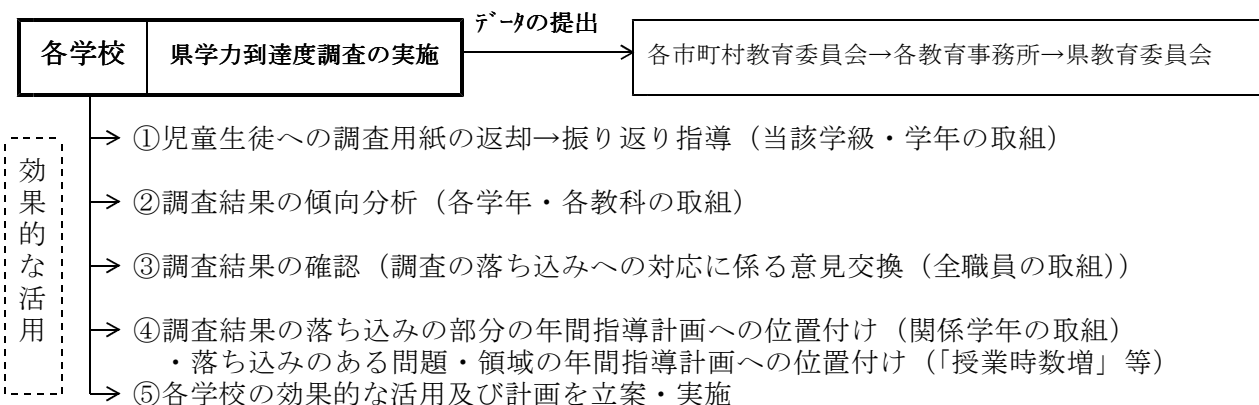
タイミングを逃してしまうと、課題意識が弱まることで学習の定着に時間がかかったり、学習意欲が低下したりする場合もある。

■全国学力・学習状況調査や沖縄県学力到達度調査の採点・集計の終了後には、早期に学校の状況をまとめ、児童生徒に調査用紙を返却し、調査の振り返りを行う。

※その際、なぜ間違ったかなどを把握させ、確実な理解につなげる。

■教師の作業としては、小学校では学年会、中学校では教科会を開催し、落ち込みのある領域等への対応を検討し、児童生徒全体或いは個々へのフィードバックを早期に実施する。

※各教科の年間指導計画へ反映させる。



2. 各学校における「確かな学力」の向上を図る具体的な取組

①取組事項の決定

②取組事項の共通理解

③取組事項の共通実践

④取組事項の検証

〔取組事項例〕 やることを全職員で決めて、取り組むことが大切！

1. 「確かな学力」の向上のために日常的に取り組むことを決める。
 - (1) 授業で日常的に取り組むことは何か。
 - (2) 家庭での学習をどう取り組ませ、習慣化を図るか。
 - (3) 学び方をどのように育てるか。
2. 各節目で取り組むことを決める。
 - (1) 各単元終了後に対応すること。
 - (2) 各学期の終了期に取り組むこと。
 - (3) 各学年で取り組むこと。
3. 授業において具体的に取り組むことと改善することを明確にする。
4. 授業改善の成果を検証するための視点づくりを明確にする。

各教師の取組→全体集約

- 1 一人一人の学力、学びへの意識、生活面の現状把握
- 2 一人一人の学力等の課題の明確化
- 3 一人一人の学力等の課題改善の方策(手だて)の明確化(学力面、意識面、生活面)
- 4 課題改善の具現化と実践

3. 授業力を向上させる授業研究会

各学校においては、教師が相互に研鑽しながら、日常的に「授業力」を高めていくシステムを構築する。

そのため、校長は、校内の教師で小グループを作り、グループリーダーを中心に研究・研修を進める組織づくりに取り組むとともに、教師同士が日常的に授業を見合い、情報交換・意見交換を通して相互研鑽する土壌を学校組織の中に定着させる。

【授業研究のメリット】

他者に授業を積極的に観てもらい、意見やアドバイスをもらったり、一緒に考えたりすることが、自らの「授業力」の向上につながる。

<授業研究会のポイント>

【小学校】本音の言える研究協議を！

研究協議の持ち方の工夫
<ul style="list-style-type: none"> ・小グループでの協議 ・協議のポイントの明確化 ・ワークショップ型の導入

授業力向上のために新たなスタート
<input type="checkbox"/> 授業研究での課題を明確にして、次の授業に生かす。 <input type="checkbox"/> 「こんなことをしたらこうなった」「この次は～したい」等、その後の取組について語る。 <input type="checkbox"/> 懇談会や学校説明会等で積極的に成果と課題を発信し続ける。 <input type="checkbox"/> 今年度の成果を教育課程に反映させる。

【中学校】授業研究のシステムづくりを！

授業研究会を年間計画に位置付ける
(教科の壁を越えて授業を見合う) <ul style="list-style-type: none"> ・教科主任会や研究部が中心になって授業研究の計画の立案 ・放課後に協議の時間を確保(新たな組織の構築) ・チームで授業研究、協議ができる機会を設定するなど、授業研究を推進する役割を組織内に校務分掌として位置付ける。

形態を段階的に	チームで授業研究する機会の設定	お互いの授業を見合うための工夫
<ol style="list-style-type: none"> 1 教科内で 2 学年で 3 学校で 4 異校種間で 		<ul style="list-style-type: none"> ・簡単に授業のポイントを参観する人に提示 ・参観者が意見・感想を書くための紙の用意 ・研究協議で共有できるテーマの工夫

4. 参加者全員が自分の考えを持ち主体的に参加する授業研究会

授業研究会は、全員参加型や隣接学年参加型、教科担当参加型などがあるが、参加者全員が発言できる満足度の高い研究会であること、授業者だけでなく参加者も「明日の授業のヒント」が得られるようにすることなど、その目的を達成するために持ち方等について工夫することが大切である。〔授業を、児童生徒の目線で観ること〕

＜いろいろな授業研究の方法＞

①ワークショップ型授業研究（参加型であれば全てワークショップ型）

- 授業を見ながら気付きを付箋に書き出す。授業研究会で付箋を指示に従ってシートに貼り付け、それをもとに授業を分析する。
- 経験年数に関係なく、参加者全員が参加しやすい方法の一つである。
- グループごとの意見交換を通して、多面的に授業を観る力が付く。

②アクションリサーチ型研究

- 授業をビデオで録画し、それをもとに授業について協議したり、実践提案をもとに協議したりする授業研究の方法。
- 授業を分析する視点を明確にして録画することが求められ、ある程度、授業力がある教員が担当しないと、授業研究会に深まりを持たせることができなくなる。
- 授業参観のため、子どもに自習を課すことなく行うことができる。授業者は、自身で実践を振り返り資料をまとめ、協議を通して他者の意見を聞くことで授業力を向上することができる。

③模擬授業型研究

- 作成した指導案をもとに教職員を児童生徒に見立てての模擬授業を行う。
- 発問の仕方や子どもへの関わり方など、新たな気付きが教師役・児童生徒役の双方に生まれる。

5. 教育課程編成の改善

各学校が、確かな学力の向上に係る課題を解決するためには、各教科における授業時数を適切に確保することが大前提となる。

教師も児童生徒も、負担を感じずに、やり甲斐を感じるような効果的な授業を展開するためには、量（時数）を確保するとともに、質（授業づくり）を充実させる必要がある。

そこで、行事等への対応として「これまでもやってきたので」の前例踏襲ではなく、児童生徒に確かな学力を保証することを目指し、下記事項を参考に行事等の在り方・持ち方について見直し、授業時数の確保に努める。

- ①授業時数確保の上で、行事内容及び練習等に係る時数、行事時数は適切か。
- ②児童生徒の負担感のない行事内容・計画か。
- ③各学年の行事の実施時期は適切か。
- ④学校全体として、行事はバランスよく計画されているか。

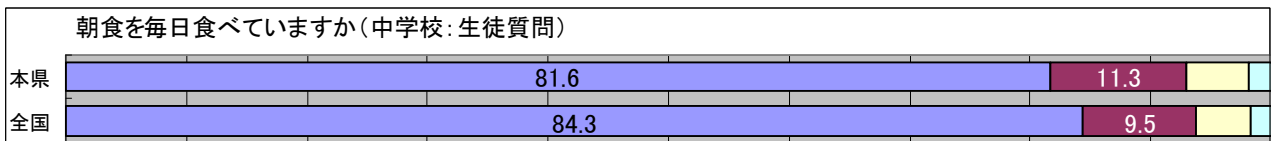
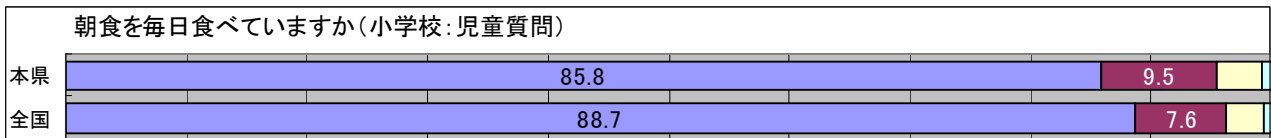


X 家庭や地域・学校が連携した取組

児童生徒の健やかな成長は、第一義的には家庭における保護者の責任のもとで行われなければならない。そのため、保護者の意識を高める必要がある。

また、各家庭を支える地域社会の役割も重要であり、各家庭は、地域に支えられ、親をはじめ児童生徒は孤立感や不安感を解消し、居場所をつくりながら多くのことを学び続ける。

なお、人格を形成するという教育は、言うまでもなく学校だけで行われるものではなく、家庭における保護者の役割、そして地域の役割も重要であり、それぞれが担っている役割を全うすることが児童生徒の健やかな成長に欠かせないのである。



〔平成25年度全国学力・学習状況調査から〕

1. 家庭における取組

児童生徒一人一人が毎日の授業に意欲的に取り組むためには、その基盤となる生活リズムの確立や規範意識などの基本的な生活習慣の形成が不可欠である。そのためには、家庭において日常生活に必要な習慣を身に付けさせるとともに、心身の調和のとれた発達を図る必要がある。下記事項は全て学習意欲の向上につながる取組である。

- 基本的な生活習慣の形成に係る取組 → 情緒の安定、規範意識の醸成等
 - あいさつ、○ 早寝・早起き・朝ごはん、※特に、朝食の摂取については徹底
 - 時間を守る、○ 家庭学習時間の設定・確認、○ 家庭での仕事や手伝い
- 親子のコミュニケーションに係る取組 → 情緒の安定、目的意識の高揚等
 - 学校での出来事を話し合う
 - 家族読書に取り組み、お互いに本の内容について話し合う
 - ◎ 将来の夢や目標（将来就きたい職業をもとに進学する学校を決める）について話し合う

2. 地域による家庭及び学校の支援

学校を地域で守り、地域で育てるということはとても重要である。学校は地域との連携を積極的に行い、学校支援ボランティアの組織化や地域住民、社会人講師等地域人材の活用等、児童生徒の実態やニーズに応えるきめ細やかな授業を展開する必要がある。

○退職教員による授業支援

- 有資格者（技術者、体育指導員、栄養士、薬剤師等）による支援
- 専門家（音楽家、陶芸家、プロスポーツ経験者等）による支援

（例）・地域ボランティアや公立図書館司書等による読み聞かせやブックトーク等の実施

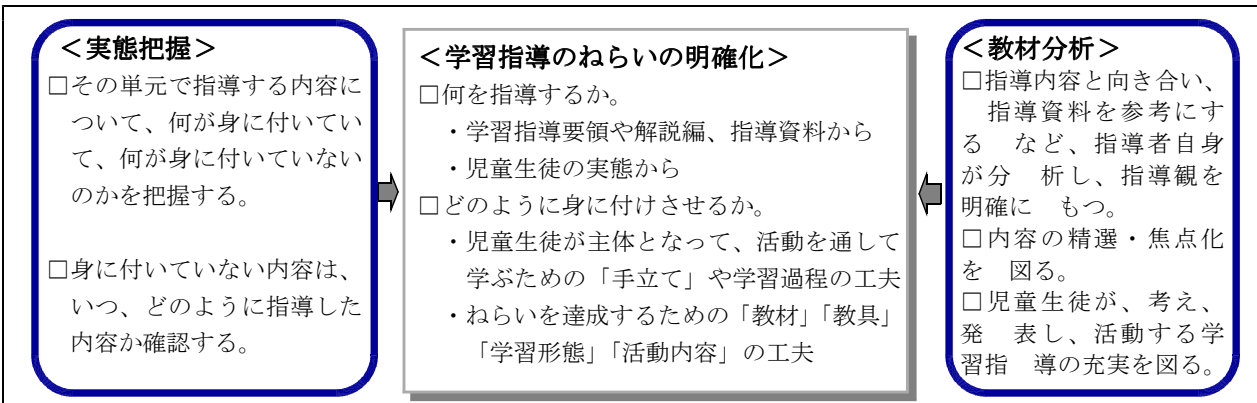
- ・ 環境整備の支援（造園業関係・電気技師等）
- ・ 部活動指導（クラブ活動指導者の支援等）
- ・ 地域人材活用による学習活動の支援・補助

（算数の採点補助・習字の指導補助・家庭科の実習補助・放課後の補習補助・ネイティブスピーカーによる外国語活動補助）

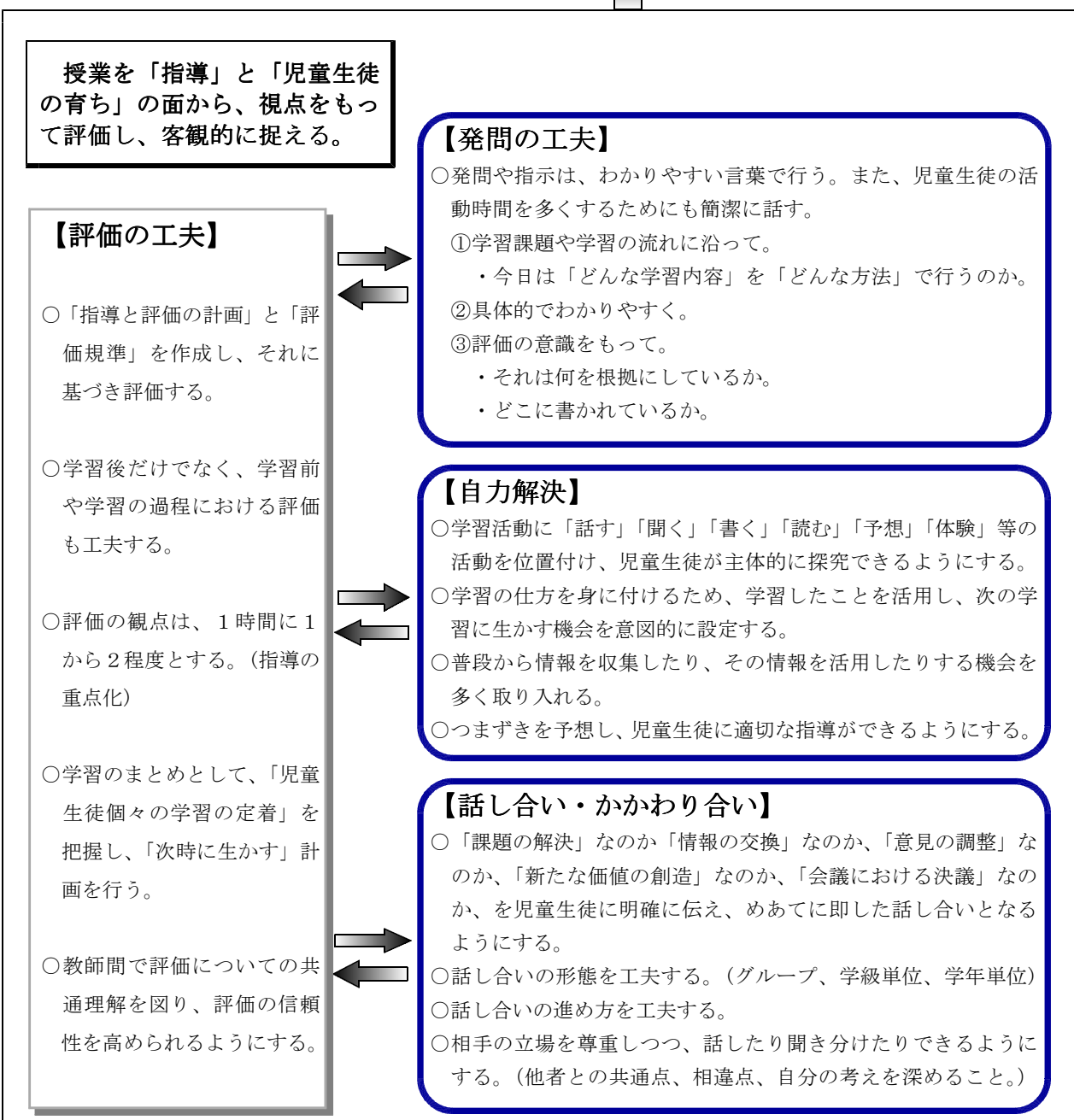
資料編

授業づくり資料① 授業づくり・学習指導の改善をすすめよう！

〔授業づくりの段階〕



〔授業展開の段階〕



資料編

授業づくり資料② 授業力診断確認シート(チェック項目例)

授業力自己チェックシート

平成 年 月 日

番号	分類	診断チェック項目	当てはまる	大体当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
1	使命感・感性	日頃から正しい言葉遣いを心がけている。	5	3	2	1
2		授業（職務）にふさわしい服装を心がけている。	5	3	2	1
3		学習にふさわしい環境づくりを心がけている。	5	3	2	1
4		教えるプロとしての誇りと自覚がある。	5	3	2	1
5		授業改善を目指し、自己研鑽（研究授業等）に進んで取り組んでいる。	5	3	2	1
6		児童生徒一人一人に、当該学年で身に付けさせなければならない内容を習得させるよう努めている。	5	3	2	1
7		明るく前向きに児童生徒に接している。	5	3	2	1
8		同異を認める心を持っている。	5	3	2	1
9		美しいものに感動する心を持っている。	5	3	2	1
10	児童生徒理解	児童生徒一人一人との会話や遊びを大切にしている。	5	3	2	1
11		児童生徒一人一人に常に気を配り、言葉かけをしている。	5	3	2	1
12		児童生徒一人一人の発言や行動を共感的に受け止めている。	5	3	2	1
13		児童生徒一人一人の学習の定着状況を把握している。	5	3	2	1
14		児童生徒一人一人の本時の学習の達成状況を把握している。	5	3	2	1
15		児童生徒一人一人の得意分野を把握している。	5	3	2	1
16	児童生徒一人一人の友人関係を把握している。	5	3	2	1	
17	教材研究	学習指導要領を理解するなど、教科等の専門的知識を深めている。	5	3	2	1
18		学習のねらいを明確に把握して、教材研究・解釈に努めている。	5	3	2	1
19		児童生徒の学習意欲を高めるための、教材研究・解釈に努めている。	5	3	2	1
20		学年の系統性を意識して、教材研究・解釈に努めている。	5	3	2	1
21		生活との関連を意識して、教材研究・解釈に努めている。	5	3	2	1
22	指導技術	児童生徒に学習用具の準備についての的確に示している。	5	3	2	1
23		本時の目標・ねらいを児童生徒に明確に示している。	5	3	2	1
24		児童生徒一人一人に目と心に向け、個に応じた指導を行っている。	5	3	2	1
25		発問（質問）や助言、説明などを意識的に使い分けている。	5	3	2	1
26		考えを引き出し、思考を深める発問を工夫している。	5	3	2	1
27		思考の過程を意識した板書やノート指導を工夫している。	5	3	2	1
28		理解状況や心理状態を把握し、それに応じた指導を心がけている。	5	3	2	1
29		ねらいと関連付けたまとめを工夫している。	5	3	2	1
30	指導と評価	週案等に、時数、活動内容、学習形態等の指導計画を明記している。	5	3	2	1
31		形成確認問題等を活用して、個に応じた指導や指導方法改善に努めている。	5	3	2	1
32		児童生徒の実態に基づいて、評価計画を立てている。	5	3	2	1
33		評価計画に基づき、児童生徒の評価を行っている。	5	3	2	1
34		指導計画・評価計画が適切であったかを振り返っている。	5	3	2	1
35		振り返りを基に、問題点を明確にして次の計画に生かしている。	5	3	2	1
36	洞察・掌握・統率	物事の全体的なありようを俯瞰して観ることができる。	5	3	2	1
37		常に、立つ位置を意識し、全体の把握に努めている。	5	3	2	1
38		集団と個を意識し、全体を把握することができる。	5	3	2	1
39		児童生徒の発言や気付きなど、細かな言動を評価し、賞賛している。	5	3	2	1
40		的確且つ明確な指示を出し、集団や個を動かしている。	5	3	2	1
41		学習規律の定着に努めている。	5	3	2	1
42		賞賛と激励、注意を明確にし、メリハリのある指導に努めている。	5	3	2	1
総合評価			/ 2 1 0			

資料編

授業づくり資料③ 授業の相互参観をしよう！(チェック項目例)

授業力相互チェックシート

平成 年 月 日

教科 () 授業者 () 評価者 ()

No.	項目	観 点	最 適	普 通	要 検 討
1	導 入	① 学習内容に対応した目標、めあてを設定している。	3	2	1
		② 児童生徒にめあてを強く意識させるための工夫や学習への興味・関心を高める工夫がある。	3	2	1
2	受容的態度	① 児童生徒の発言(吹き、囁きも含めて)等を受容的に受け止め、的確に返すなど、授業に生かしている。	3	2	1
		② 児童生徒の考えや表現などを積極的に認め、児童生徒のよさを引き出している。	3	2	1
3	発 問	① 「なぜ?」「どう考える?」など、児童生徒の思考を促し、考えたくなる発問をしている。	3	2	1
		② 児童生徒に理解できる言葉、速さで話し、既習事項を意識させる発問をしている。	3	2	1
4	説明・指示	① 内容が明瞭で分かりやすく、児童生徒が楽しく参加したくなるような表情、態度で話をしている。	3	2	1
		② 児童生徒の学習状況に応じて、具体的で的確な指示を出している。	3	2	1
5	授 業 の 準 備 物	① 授業に必要な教具、資料を適切に準備している。	3	2	1
		② 児童生徒が使う学習用具や学習プリントなどを適切に準備している。	3	2	1
6	展 開	① 児童生徒が考えをまとめたり表現したりする時間を確保している。	3	2	1
		② 児童生徒の考えを机間指導等で把握して、多様な考えを整理してかかわらせている。	3	2	1
7	終 末 (まとめ)	① 本時のまとめを板書、ノート、説話などでの的確(めあてと対応)に行っている。	3	2	1
		② 本時の学習をもとに、次時への意欲付け(宿題など)が適切に行われている。	3	2	1
8	計画的板書	① カードや教具等を活用し、見やすく、わかりやすい板書をしている。	3	2	1
		② 導入、展開、終末(まとめ)まで、児童生徒の思考過程に沿って構造的な板書をしている。	3	2	1
9	指導と評価	① 授業前や授業中に、児童生徒の考えや理解の程度を把握している。「わかる授業のポイント」「形成評価」「フィードバック」)	3	2	1
		② 児童生徒の実態に応じた一人一人を大事にした指導をしている。	3	2	1
10	学 習 規 律	① 学びを深めるために、話の聞き方、発表の仕方、質問の仕方など適切に学習規律の指導をしている。	3	2	1
		② 教科の特性を生かし、児童生徒の自発的な学習スタイルを確立している。	3	2	1
総合的な評価 所 見			／ 6 0		

本冊子は、発行部数に限りがあり、関係者全員に配布することができません。よって、学校及び関係機関におきましては、必要に応じて、沖縄県教育委員会（下記アドレス）からダウンロードして御活用ください。

わかる授業 Support Guide

発行日 平成25年10月
発行 沖縄県教育委員会
義務教育課学力向上推進班
〒900-8571 沖縄県那覇市泉崎1丁目2番2号
TEL 098(866)2741 FAX 098-866-2750
WEBサイト <http://www.pref.okinawa.jp/edu/index.html>
〔沖縄県教育委員会〕
